
ピウニー卿の冒険！（序章あるいは別の物語）

オオカミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピウニー卿の冒険！（序章あるいは別の物語）

【Nコード】

N7199V

【作者名】

オオカミ

【あらすじ】

竜殺しの騎士ピウニー卿は人々を苦しめていた山頂の魔竜を倒す。だが、魔竜が最後の力を振り絞って吐き出した呪いを、その身に全て受け止めて、…果てた。それから時は過ぎ、ある酒場から物語は始まる。

2011年9月22日同名タイトルで長期連載開始のため掲載終了しました。

タイトルは「ピウニー卿の冒険！」 「ピウニー卿の冒険！（序章

あるいは別の物語」に変更。

（前書き）

長編用プロットだったので、長編にまとめるまで時間がかかり
そうなのでSS的に書いたものです。
文字数多くて申し訳ないです。

2011年9月22日同名タイトルで長期連載開始のため掲載終了
しました。

タイトルは「ピウニー卿の冒険！」 「ピウニー卿の冒険！（序章
あるいは別の物語）」に変更。

その日、ピウニー卿は行きつけの酒場でチーズと果実酒を嗜んでいた。

小さな酒盃に入れた紫色の液体はふくよかな香りで、ピウニー卿は満足気だ。

また、少し青いカビの生えたチーズは、癖があるが果実酒と共に口に含めば、さらに芳醇な味わいだっただ。

ピウニー卿は最後の一口を煽る。うむ。実に美味しい。

「おおおおおう！ ちょっと、誰だ、このボトル開けたヤツ！これは、竜殺しの騎士様がキープしてた自慢の果実酒で…って、ああああ！ 極上のアオカビチーズまで干切って、ちくしょう！誰だ、泥棒か！意地汚い食べ方しやがって！」

なにやら、酒場の奥から店主の騒がしい声が聞こえてきた。まったく、興のない事だ。ピウニー卿は、やれやれと立ち上がる。

「おい。お前、その入れ物なんだ。」

店主の声が、えらく近くに聞こえた。どうやらピウニー卿に向かって怒っているようだ。

「まさか、お前が開けたんじゃないだろうな…。」

人聞きの悪い。

自分がキープしていた酒を開けて何が悪い。

「このネズミ野郎………！！おいつ、

取ったり！

「ふにゃー！ー！」

ピウニー卿が、（針のような）剣を抜いた。間一髪で顔を背けた猫！　だが、ピツ…と、セピア色の自慢の毛を掠めて、驚いた猫は足を踏み外しかけるが、かるうじて踏ん張った。

「ふしやー！ー！ー！」

猫も負けてはいない。シャキンと爪を出して、ピウニー卿の身体を払う。おおっと！　ピウニー卿は間一髪のところを一步下がって直撃は免れたが、剣を下げていたベルトが運悪く猫の爪に引っかかってしまった。

「なぬっ！？」

「にゃにゃっ！？　うにゃうにゃうにゃー！ー！？」

前足に何か気味悪いものがひっかかった猫は、パニックに陥り、きゆうりの酢漬けと食用酒、それにパプリカ、吊るしているたまねぎ、各種調味料、食器、諸々巻き込んで戸棚から足を踏み外した。

「うおおおおおお！！　タマー！ー！ー！ー！！！」

店主の悲痛な声と、ガシャーンンガラガラ、という（お約束の）食器やら、ガラスやらが粉碎される音が響く。

ゴン。

最後に金属で出来たボウルが落ちてきて、酒場は静寂を迎えた。

床には、酒と酢と調味料を頭から被って悲惨な状況になった猫と、その猫の前足に引っかかっているネズミが居た。

「まったく、役に立たない猫め！…せっかく綺麗な毛並みだから置いてやっていたものを、ネズミ一匹捕まえられないなんて…。もう二度とうちの敷居を跨ぐなよ！」

店の裏口から店主へと追い出された猫とネズミは、ころころと裏路地を転がってぐったりした。

店主の言った通り、元は綺麗だったのだろう、猫のセピア色の毛並みはどろどろで、しょんぼり耳が下がって無残なものだった。猫は、面白く無さそうに鼻を鳴らして、前足に引っかかったネズミをぺちつと払うと、長いため息をついた。

「もう、なんなのよ…。レディにネズミを捕まえようとさせるほうが間違ってるんだわ…。ああもう、どろっどろ。」

「おい、猫、投げるな、粗雑に扱うな、もっと丁寧に…ん？」

「え？」

猫の綺麗なグリーンの瞳が、ピウニ卿をしげしげと眺めた。ピウニ卿の艶々したこげ茶色の瞳も、同じように猫をしげしげと眺めている。

そして、同時にこう言った。

「ネ、ネズミがしゃべってる………!?」

「猫がしゃべっておるだど………!?」

街道をセピア色の毛並みの猫が歩いていて、その背の上では、薄い金色の毛並みのネズミが髭をゆらゆらと揺らしている。

「いい天気だな。サティ。」

「そうね、ほんっとーにいい天気ね。」

「機嫌が悪いな。人参を食べたくらいで怒らなくてもよかるう。」

「別に怒ってないわよ。」

「いや、怒っておる。」

「怒ってない。」

「最後まで人参を残しておるから嫌いだと思ったのだ。」

「もう、ピウニーうるさい。怒ってないってば！ それより、騎士のくせにレディの背中に乗って移動するのは何事なのよ!」

「遅いから乗れと言ったのは、サティだろう。」

ピウニー卿はすんと降りて、サティの横を歩く。背中から重みが無くなったサティは、ピウニー卿の歩幅に合わせるようにゆっくり

と歩いた。

サティの機嫌が悪い原因は、昨日まで滞在していた村の宿屋の娘さんが出してくれた食事のことだ。人の気配のあるところに立ち寄った時は、サティがかわいい猫のおねだりポーズを使って、人間の食べ物をもらっている。それをピウニー卿と半分こして食べるのが常だ。(騎士であるピウニー卿は、このような形で女性に借りを作りたくはなく、大いに不本意だったのだが、今は非常時であり仕方がない…)ということ、サティと協力して、このような体制になっているのである。(昨日の食事には人参のグラッセが1つだけ入っていた。いつもなら、ピウニー卿に頼んで剣で割って食べるところだったが、「いらぬのなら私が食べるぞ。」と言って、ピウニー卿がひよいばくと1人で食べてしまったのである。人参のグラッセ、甘くて好きなのに！ 騎士のくせに！

ピウニー卿いわく、「騎士たるもの、出された食事は全て食べなければならぬ。」だそうです。

それを聞いたサティは、好きなものを最後に残しておくたちだと、大層憤慨したが。

酒場を追い出されてから1ヶ月。ネズミのピウニー卿と猫のサティは、こうして2匹で旅をしていた。

この2匹には、とある共通の事情があった。

それはこういう話である。

あるところに魔法剣を使いこなす騎士が居た。人々を苦しめていた、山頂の魔竜を倒したという。

そして魔竜が最後の力を振り絞って吐き出した呪いを、その身に全て受け止めて、騎士は果てた。

…が、その物語には続きがあった。

魔竜が最後に吐き出した呪いによって、誰にも気付かれることなく騎士はちいさなネズミへと姿を変えてしまったのである。

ちなみに、騎士の魔力によって象られている剣は、律儀にも、主と同じネズミサイズになったという。

「へー。」

「へーって。おい、サテイ。感想はそれだけか。」

「うーん。あのね…。」

そして、もう1つはこうだ。

あるところに古代魔法に造詣の深い女魔法使いが居た。師匠である賢者と共に、とある国の魔法施設の研究や魔力充填を生業にして生きていたという。

あるとき、研究に身を捧げる余り暴走した死霊使いを止めるために、死霊使いが放った呪いを全てその身に受け止めて、女魔法使いは果てた。

…が、その物語には続きがあった。

死霊使いの呪いによって、誰にも気付かれることなく女魔法使いは小さな猫へと姿を変えてしまったのである。

ちなみに、魔力も猫サイズのため、杖を使うことが出来ず、あまり強い魔法は使えない。

「あー。」

「あー、って。ピウニー、感想はそれだけ？」

「うむ。…似たような話だな。」

「…まあ、そうね。」

そういうわけなので、2匹は同じ境遇として意気投合し、この魔法を解くことの出来そうな人物、サテイの師匠であるという賢者の元へと共に旅をすることになったのである。旅は道連れ、世は情け。

「サテイ、機嫌は直ったか。」

「だから、怒ってないってば。」

「うむ。」

「何よ。」

「サテイは機嫌が直ると、尻尾の動きがゆっくりになるな。」

「もうほんとに、ピウうるさい。」

「名前を略すな。」

「騎士様なら、もうちょっと厳粛に出来ないの？」

「別に誰も聞いてないのに、構わんじゃないか。」

「分かった分かった、ちよつと髭！ 髭揺らさないで、むずがゆい。」

「勝手に揺れるんだ、仕方なかるう。」

夜。街道から少しはなれた森の、木の下で2匹は休んでいた。周囲の様子が分かるほど、月の大きな晩だ。サティは丸くなって、その喉の毛皮にピウニー卿が埋まっている。大体、こういう感じで2人ではない、2匹身を寄せ合って眠るのが常だった。

サティの毛皮は艶やかでシルクのような触り心地だ。いつも河原を見ては水浴びをしているし、猫になっても使うことが出来たという。初歩の浄化の魔法で汚れひとつ無い綺麗な毛皮を保っている。ピウニー卿の毛皮も、ふわふわと柔らかで温かい。サティと比べると身体が小さいから、相手の毛皮を思い切り堪能出来るのは大体ピウニー卿で、それがサティには不満だった。

「おい、サティ、締めすぎだ。ちよつと緩め…。」

「んー、いいじゃないちよつとくらいふかふかしても…」

「…しっ…サティ、静かに…。」

常とは違うトーンになったピウニー卿の声に、サティも声を抑える。前足を少し緩めて、ピウニー卿を解放した。ピウニー卿は腰の剣を抜くと、前方に睨みをきかせる。とても凛々しい姿だが、ネズミである。サティは身体を起こして、自分の身の魔力を集中させた。猫の姿だと使える魔法は限られる。初歩の初歩程度の魔法しか、使うことは出来ない。だが、無いよりはマシだろう。

グルルル…。

茂みの向こうから聞こえる唸り声。
恐らく、野生の狼か。

「下がっている。」

「え。」

「安心しろ。」

ピウニー卿がサティを庇うように一歩前に出て振り向いた。ゆっくりと、頷く。

「サティは、私が守る。」

ピウニー卿のYの字の口元がちまちま動き、重々しい口調で言った。
…それは、眼前の敵から必ず守るといふ、騎士の固い決意だった。
小さな丸い耳がぴこぴここと忙しく動いている。サティのグリーン
の瞳が驚愕に広がって、何かを言いかけたその瞬間、茂みの奥から
狼が飛び出した。

「ピウニー…！」

とう…！

ピウニー卿が大きく跳躍した…！

キャン…！！

狼の吼え声が響く。ピウニー卿の剣が、狼の前足を薙いだのだ。体格差もあってピウニー卿の身体は狼の下を潜り抜ける。…だが、
低！

攻撃の位置低！

とう！…ってかっこよく跳躍したのに、最下段攻撃！

狼の横を前転してしゅたつと剣を構えたピウニー卿の身体を、サテイはその剣に気をつけて啞えて横に飛んだ。勢いを殺してターンし、すぐに止まって眼前の狼を睨みつける。

ポトリとピウニー卿の身体を落とすと、尻尾を大きく膨らませた。

「…くっ、不覚…っ！」

「ピウ、私も一応魔法使いの端くれなんだから、バカにしないで。」

「バカになどしておらん。」

「だったら一人で突っ込まずに、多少は頼りなさいよ。」

「……。」

前足を傷つけられて、気が昂ぶっただろう。狼は鼻に皺を寄せ、さらに大きな唸り声でこちらを睨みつけている。

「…すまなかつた。」

「分かればいいのよ。」

「サティ…魔法で気を引けるか。」

「乗って。」

サティが頭を下ろすと、ピウニー卿がそこに登る。

「限界まで近くに行つて、魔法で私が気を引く。しっかりと掴まつて。」

「その隙に私が狼の身体に飛び移つて、魔剣の魔力を狼に送り込む。ショックを受けて気絶くらいはさせられるはずだ。」

「了解。」

サティが、たつ…と地面を蹴つたのと、狼が再び跳躍したのは同時だ。狼の牙がサティに届く前に、サティは呪文を唱えた。バチィ…！と小さな電撃の音が狼の足元で響き、その衝撃に、狼がキャイン！と鳴いて、後ろに飛んで頭を低くする。さらにそれを追撃するようにサティが距離を詰めると、狼が顔を上げる瞬間にピウニー卿がその頭上に飛び移つた。

喰らえ！

ピウニー卿が思い切り狼の眉間に剣を刺し、カッ…！とそこが光る。その瞬間、魔力が膨らむのを感じた。…これが、剣の魔力…！と、サティがハツとした瞬間。

キャウウウウン…！

狼が思いっきり頭を振って、ピウニー卿を放り投げた。綺麗な放物線を描いて、ピウニー卿は木に激突し、ずるずると地面に落ちる。その末路を狼は確認しないまま、キャンキャン…！と鳴きながら、いや、泣きながら、森の奥へと帰っていつてしまった。

去った狼にほつとしたサティは、すぐにピウニー卿へと意識を戻す。

「ピウニー…！」

激しく木に叩きつけられたピウニー卿は、地面の上でぐったりとしていた。目を閉じ、かくりと落とされた前足は、剣を握ってはいなかった。

「え…やだ…ピウ…ピウニー…！死んじゃったの？…お願い、目を開けて。」

悲痛なサティの声にも、ピウニー卿は答えなかった。耳は萎れ、髭も揺れていない。

ピウニー…！！

綺麗な薄い金色の毛並み、黒に近い濃い茶色の瞳、まるくて小さな耳、ぴくぴくといつも楽しげに揺れている髭、Yの字の口元、小さな前足、短い後ろ足、ほとんど無い尻尾、ぴくぴくといつも揺れている髭（2回目）、Yの字の口元（2回目）。…もう動かないの？

サティの大きなグリーンの瞳からポロリと涙が零れ落ちた。

「ピウニー…ピウニー…、ごめんね。人参取られたくらいで拗ねたりしないから。小さいってバカにしたりしないから。ほほ袋に食べ

物入れてみせてよーってからかわないから。足短いって笑ったりしないから。お腹がたましいとか、洋ナシ体型とか、言わないから。…だから…。」

すすすんと、サティが鼻を鳴らして、ピウニー卿の小さな身体にそつと顔を寄せた。

「だからお願い。…もう一度私のことをサティって呼んで。」

ピウニー卿の口元にサティの口元が触れ、ぺろりと舐めた。

「腹がたましいとはどういうことだ、サティ。」

「え、ピウニー…?…生きてるの!?!」

「私がアレくらいで死ぬものか。」

「…ああ!…ピウ、よかった…!貴方が死んだら、私どうしようかと…!」

サティは、両手でピウニー卿の首に抱きついた。ペロンとその首筋を舐める。

しよっぱ。

ん?

両手で?

首筋を？
舐める？
しよっぱい？

「お、おい…サテイ、待て、離れる…サ。」

「え？」

サテイの下には、鍛え抜かれた男の身体があった。全裸で。抱きついているのは、男のものとか言いようのないしつかりとした作りの首で、確かさつき、サテイがそこを舐めたはずだ。はずだつていうか、舐めた。

そして、眼前には、薄い金色の髪とそれより少し濃い色合の無精髭を生やした、精悍な男の顔。凜々しいこげ茶色の瞳は、今は落ち着かなさげに泳いでいる。

「え、待って、ちょっと、なにこの」

「サテイ、頼むから、動くな。」

ピウニー卿の上には、華奢だが細すぎるといってもない、まるやかな女の身体があった。全裸で。抱きついているのは、女のものとか言いようのないあまり筋肉のついていない腕で、自分の鍛えた胸の上には当然のように柔らかな双丘が当たっている。視線を落せば見えるはずだ。つていうか、今ちらっと見えた。

顔を少しずらすと、こちらを見ている大きなグリーンの瞳。さらさらと自分の身体の上に零れ落ちるセピア色の髪が、肌を撫でてくすぐりたい。

「ちょっと、今何見」

「いやいやいやいや、サテイ、…だから、今、身体を離すな、見える！」

「見えるって、見ないでよ変態！」

「見えたただけだ、不可抗力だろう。人間きの悪いことを言うな、くつつくな！」

「離れるのかくつつくのかどっちよ！」

「いやすまん、ちょっといろいろ事情があつて、くつついても離れなくても男の事情がだな。…とにかく、今は、離れるな。」

「…あ、やだ、ちょ、と、腕、回さないで。」

「支えないと落ちるだろう！」

「誰がよ！」

「サテイが、だ！ 落ちたら地面だぞ、お前の身体が泥で汚れる。」

2人の間に沈黙が下りた。サテイの顔が一瞬赤くなる。

「地面には石も転がっているし何かがあるか分からん。お前の肌が傷つく。だから…」

「ピウニ―…。」

「少し落ち着け…サティ。」

そう言いながら、ピウニー卿の逞しい腕にさらに力が籠もった。腕に絡みつくように落ちるセピア色の長い髪は絹のような手触りで、猫の時のサティの毛並みを思い出させた。男の腕がサティの背を撫で、長い髪をゆっくりと梳いてサティの心を落ち着かせていく。落ち着かせて、おちつかせ…

「って、この状況で落ち着くかつ！」

「ここは落ち着くところだろう！」

「大体、なんで裸にベルトなのよ！」

ピウニー卿は全裸に帯剣用のベルトのみ着用という姿だった。ネズミのときも言ってみれば全裸でベルトしていたから、当然といえば当然だ。

「知らん！…私が聞きた…」

「だって、だ…、」

2人の言い合いが同時に止んだ。

サティの形のよい眉が歪む。それに気付いたピウニー卿は何故か目を逸らした。

「ピウニー。」

「気にするな。」

「気になる。変なところに何か触ってる。」

「分かっている。とりあえず下手に動くな。生理現象だから気にするな。」

生理現象、という言葉に、サティはなぜかカチンと来た。

「ふーん。生理現象なんだ。」

「なぜそこで機嫌が悪くなる。」

「別に。」

「おい、サティ。何に怒ってる。」

ピウニー卿の腕から逃れようと、サティがガサゴソと動き始めた。

「お。おい、動くな。」

「離してよ。」

「待て。話を聞け。…うっ、どこに触って…」

「もういやちょっとまたナニかしっかりしてきたし…。もううっうっう、ピウニーちょっと落ち着きなさいよ！」

「いやっていうな。サティが動くからであろうっ！…そもそも、魔法使いなら、服とか出せんのか！」

「召喚魔法は杖が無いと無理…。」

サティの動きがぴたりと止まった。待てよ。杖無しで出来る、召喚魔法が1つあったはずだ。

「ああ！」

今、気付いた…という風に、サティががばつと身体を起こした。起こした途端、髪と身体がふると揺れる。ああ…、実にいい眺めだ、大きすぎず小さすぎず適度な大きさと形が。って、おい！

「サティ、身体を起こ！」

「うわあああああ、見るなああああああ。」

「見せるな！」

「見せてない！」

「見えるんだ！」

「もう分かったからちょっと黙ってよ、目え閉じてよ…！」

「ああ、そうか！」

「杖の召喚は杖無しで出来るから、杖さえあればどうとでもできるはずよ！」

「よしきた、サティ、それでいいじつ。」

「だから、ピウニー目え閉じてってば。」

「あ、ああ、すまん。」

ピウニー卿が目を閉じたのを確認すると、サティは呪文を唱えた。

「ピウニー。」

「どうだ。」

「残念なお知らせがあります。」

「…。」

杖召喚の魔法は、残念ながら反応しなかった。召喚用の魔法は作動したが、なぜか自分の元に対象物がやってこない。

「よく試したのか。」

「試したわよ。杖以外にも、念のため服も本も道具もいろいろ！全部！でもダメだった。う…私達このまま歩く羞恥プレイのまま過ごさないといけないの！？せっかく戻れたのに全裸なんて、同じ全裸ならまだ猫とネズミの方がましよ！」

「おいサティ…おい、泣くな。」

ピウニー卿は、がばーっと自分の胸板に突っ伏したサティの髪を撫で、その柔らかな身体が落ちないように気を使いながら自分の半身を起こした。裸の身体を抱き寄せながら、優しく囁く。

「お師匠の賢者殿に連絡は出来ないのか。」

「ああ！」

ふたたび、サティががばつと顔を上げた。ゴンッ！

「いだっ！ 急に顔を上げるんじゃない！」

抱き寄せられていたため、顔を上げた途端ピウニー卿の顎にサティの額がクリーンヒットした。サティもそこそこダメージを食らう。額をさすりながら顔を上げると、そこには顎をしよりしりとさすっているピウニー卿の精悍な顔があった。近！ ものすごく近！ あんなにかわいかったびくびく動く髭が、今はむさくるしい無精髭になっているなんて。それに何気にお膝の上にお姫様抱っこ状態になっているし。全裸で。

改めて考えると、何なんなのこの状況！ 助けて師匠！
それにまた、何か変な感触があたってるし！

「もう、ピウニーまた目え開けてるし！ 話進まないし！ 師匠！ しよーーーーー！！！」

『はいはい。久しぶりじゃのう、サティや。死霊使いとの戦いぶりじゃないかのう。』

サティの声に応じたのか、2人の眼前に、食事をしている白い長い髭をたたえた優しい瞳の老人の姿が、ぼんやりと浮かび上がった。

『かわいい弟子の呼び出しに応じるのはやぶさかではないんじゃないが、夕飯時は避けて欲しかったのう。それに、時と場所を考えねばならんぞ、サティよ。わしじゃからまだしも、杖の賢者や剣の賢者あた

りが呼び出されたら、鼻血もんじやて。ふおふおふお。』

第三者から見れば、2人は、全裸の男の上に全裸の女がお姫様抱っこ状態にしか見えない。

サティは自分の裸を隠すように、ピウニー卿に抱きついた。

「この格好には突っ込まないでください。」

『サティよ、まずその格好に突っ込まずして、何に突っ込むのじゃ。』

「おい、ちょっとサティ、それ以上くつつくな！」

「だって、見えるし！ ピウが変な格好させるからでしょう！」

「馬乗りの方が問題あるだろうが。…くっ、だから動くな、それ以上…っ」

「やだー、ナニかあたってるとばー！ー！」

『ふおふおふお…馬乗りとはまた盛んじやのう。わしもあと2000年ばかり若かったら…』

「いや、これは、違います賢者殿！」

『かまわんかまわん。多少おなごが積極的なほうが。』

「だから違うんだって、師匠聞いて！」

夜もすっかり更けていた。

『ほう。貴殿があゝの竜殺しの騎士ピウニ―卿とはなあ。で、サティが口元を舐めたら元の姿に戻った…と。』

「はあ。恐れ入ります。」

「それで…ひとまず杖を召喚しようと思ったんですけど、魔法が効かなくて。」

『そりゃあそうじゃろうなあ。』

お髭の賢者は、ふむふむと髭を撫でた。転送してくれた服を身に着けて、やっと落ち着いていた2人は首を捻る。

「どういうことですか？」

『だって、サティの杖折れとるもん。』

「え。」

『先の、死霊使いとの戦いで折れたじゃろ。』

「あ、忘れてた。」

「忘れるなよ！」

「だって。」

杖が無ければ、上位の魔法は発動しない。持ち物召喚や転移の魔法は、他の物体や座標に干渉するため上位魔法にあたる。杖に封じた魔方陣や術式が無ければ、簡単には作動しない。

「どうすれば…。」

『ふむ。…サティヤ、とりあえずわしのところに一度帰りなさい。』

その呪い、詳しく見てみなければ分からんからのう。杖も作り直さ
んとな。』

「…待つてください賢者殿。…サティと私の呪いは、解けたわけでは
ないのですか？」

『完全には解けてはおらんみたいじゃよ？ サティの魔力は、いま
までの…そうじゃの、3分の1ほどしか戻っておらぬ。残りは別の
魔力に封じられておるようじゃ。』

ピウニー卿が顎に手を充てて、眉をひそめた。

そういえば、先ほど狼に魔法剣の魔力を放ったときは、ほとんど自
分の力が発揮できなかったのだ。かつては魔竜の鱗を傷つけたほど
の魔法剣の技だが、いくら自分の身体がネズミだとしても、狼を倒
すどころか、泣いて退かせる程度にしかならなかった。

「そういえば、私の魔法剣もほとんど役に立ちませんでした。その
影響でしょうか。」

『恐らく、そうじゃろつのう。』

「浄化の魔法や雷撃の魔法は使えましたよ。」

『わしらの場合は、魔力超過したときは体力を使うからのつ。多少の無理は効くじゃろつて。』

ふむ。…サテイが考え込んでいると、猛烈な怒りのオーラを隣から感じた。

…ピウニー卿が、猫一匹程度なら視線で殺しそうなほど、睨んでいる。

「サテイ…。」

「な、なに、なに怒ってんのピウニー。」

「魔力超過したときは体力使うというのはどういうことだ。」

「…どういふことだも何も、その通りで…。」

「サテイ！ 猫のときは、魔法を使うな！」

「なんで、そんなに怒ってるのよ。」

「怒ってはいない！」

「いや、明らかにおい」

「サテイ！」

ピウニー卿はきわめて不機嫌だ。旅をしていたときは、サテイはしょっちゅう浄化の魔法を使って自分たちの毛皮を綺麗に保っていたが、それだけのためにサテイの体力を消費していたかもしれないと考えると、ピウニー卿はなぜか苛々した。

さらに何か言い募ろうとしたピウニー卿を遮って、サティは賢者へと視線を移す。

「師匠。それならば、私達はなぜ元の姿に戻ったのでしょうか。」

「恐らく、3分の1は魔力が戻ったからじゃの。」

「残り3分の2は？」

「戻っておらんのだ。」

まだ何か言いたげだったピウニー卿も、2人の会話をおとなしく聞いている。

「師匠。…それならば、呪いの魔力の3分の1が取り払われたのは何故でしょうか。」

弟子の質問を受けて、賢者は再びふむりと髭を撫でた。

『古来より、真に元に戻って欲しいという願いと愛と真心のこもった恋人のチツスは変化の呪いを解くものじゃろうて。』

「…。」

「…。」

真に元に戻って欲しいという願いと愛と真心のこもった恋人のチツス（注：キス）？ それを聞いた、サティとピウニー卿の表情が微妙なものになった。

「えー。賢者殿、それは。」

「つまり…。」

『ちよつと中途半端なチツスじゃったということじゃの。』

まさか、中途半端なキスでも呪いが解けるとは。

逆説的に言えば、真に元に戻って欲しいという願いと、愛と、真心と、恋人、この中の、何らかの要素があつたということか。あのときの2人に。キスというよりも、舐めたという表現の方が当てはまる気がするが。

「それはつまり…。もう一度真に元に戻って欲しいという願いと愛と真心の籠もつた恋人同士のキスをすれば呪いが解けるということでしょうか。」

ピウニー卿がやや真剣な顔つきで、賢者に問うた。え、なにその質問。どういう意味？ ワンモアチャンスのな？…サティがうさくささそうな表情でピウニー卿を見たが、あっさりと、賢者は首を振った。

『んや、もう無理じゃの。恐らく変化のきつかけにはなるが、呪い自体を消し去るのは無理じゃ。』

「え。」

「え。」

『え。知らんの？』

3人が3人それぞれ、きよとんとした表情になった。賢者がごく当然のこのようにきっぱりと言う。

『だって、チツスによる呪い解除のお約束は1回じゃもん。』

「なぜですか。」

『当たり前じゃよ。あれは世界の願望と夢と希望で出来た例外処理じゃし。そんな例外が何回もまかりとうとつたら、わしらみたいな魔法使いいらんじゃろ。それに呪い解くのは何回もちゅちゅちゅちゅしてるところを見たことあるかの?…普通はそんなに何回もかからんじゃろ。1回じゃ1回。チャンスは1回と相場が決められておるのじゃ。』

「相場だと…。くう…っ、それが世界の答えか!」

何故か、ピウニー卿が頭を抱えた。

『じゃからあとは普通に魔法を解析して、呪いを解く術式を作るしかないのう…。』

がっかりと2人は気落ちする。

『まあ、新婚旅行じゃと思て、ゆっくりわしのところに来るとよかる。サティヤ。』

「はい? つて新婚旅行!？」

『自力でおいで。』

「へ?...じりきで?」

『お前さんの座標分かるから迎えに行けるんじゃないけど、ついでに杖の賢者のところで修理中のわしの杖回収して、お前さんの杖作ってもらってからおいで。』

「ええええ!?!」

『愛に障害はつきものじゃからのう!ふおふおふおふおふおふお!』

「ちょ、師匠!ししょー!愛って、愛ってなんですか!」

『愛とは試練じゃよ。修行じゃよ。ふおーふおふおふおふお。』

それ以上の説明が面倒になったのか、賢者は消えた。

呆然とそれを見送るサティ。

何事かを真剣に考えているピウニー卿。

やがて、ピウニー卿がぼつりと言った。

「愛、か...」

「何よピウニー。」

「サティ。」

隣に座っていたピウニー卿の低い甘い声が、すぐ耳元で聞こえた。

ピウニー卿は若干引き気味のサティの腕をむんずと掴むと、ずいぶん熱の籠もった瞳で見つめてくる。もう片方の手で腰を抱き寄せ距

離を詰めた。腕をつかんでいた手を離して背に這わせ、サティのセピア色の髪を梳くように頭を抱きかかえる。

「あのとときのサティの口付けは…、元に戻って欲しいという願いと愛と、真心と、恋人と、どれにあたるんだ…？」

「…は？ ちょっとピウニーさん？急にどうしました？」

「サティ、私は…。」

ピウニー卿の甘い吐息がサティに降りてきた。色めいたそれはサティにも抗い難く、2人の顔が自然と近づく。

「ピウニー…。」

「サティ…。」

どちらからともなく互いの名前を囁くように呼んで、2人の唇が触れ合

「うきよ…！」

「おつふ…！」

2人の唇が触れ合う瞬間。

ピウニー卿の身体は絹のようなさらさらのさわり心地の毛皮に沈み込み、サティの身体に小さなネズミの重みがかかった。今まで着ていた服が、中身を失ってしょんぼりと地面に崩れ落ちていく。

「え。」

の石が付いた首輪をしている。その背の上には、薄い金色の毛並みのネズミが乗っていて、小さなベルトに剣を挿していた。

「機嫌が悪いな。寝てる途中で元に戻ったくらいでそんなに怒らなくてもよからう。」

「怒るわよ！ 1回呪いが解けたら8時間は戻れないし、そのあと16時間は人間になれないんだから！もっと計画的に利用しないと困るでしょ！それに、起きたらはだ…はだ…。」

「はだ…、なんだ。」

「なんでもない！」

「大体、私のせいではないだろう。寝ぼけてサティが私の顔を舐めたから…」

「もうー！ー！ ピウニー、それ以上言っと落すわよ！」

「落すわよ」というサティの声に、ピウニー卿が先制を切つてすとんと降りた。髭をゆらゆらと揺らしながらサティの横を歩き始める。背中から重みが無くなったサティは、ピウニー卿の歩幅に合わせるようにゆっくりと歩く。怒っているならさっさと先に行けばいいのに、ピウニー卿が降りて歩いているときは、必ずサティは歩幅を合わせてゆっくり歩くのだ。その様子を見ると、ピウニー卿はとてつご機嫌な気持ちになるのだが、言葉にするとサティが怒るので、ただ髭を揺らすだけに留める。

サティのセピア色の毛並みがつやつやと輝き、尻尾がぴんと立っている。

並んで歩くピウニー卿のお髭が、満足げに揺れていた。

竜殺しの騎士ピウニー卿と、稀代の女魔法使いサティ。

2匹の……いや、2人の冒険は、これから。

(後書き)

「ピウニー卿」

魔法剣をたずさえた竜殺しの騎士。ただし外見はキンクマハムスタ
ー。

薄い金色の髪(毛並み)に、黒に近いこげ茶色の瞳。

「サテイ」

古代魔法をも操るといわれている稀代の魔法使い。ただし外見は猫
のシンガプーラ。

セピア色の髪(毛並み)に、グリーンの瞳。

本文中、ピウニー卿は「ネズミ」と描写していますが、本来はキン
クマハムスターです。ほほ袋あります。

魔法や賢者、登場人物などの設定はあまり作っていません。

ネズミと猫が仲良く旅してる絵と、変身が解けて全裸乙…という情
景が浮かび、書いたものです。

健全な話を書く予定だったのですが、私が書くとなぜか容赦なく変
態な話になりました。なんでだろう…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7199v/>

ピウニー卿の冒険！（序章あるいは別の物語）

2011年10月9日01時41分発行